**◇会　場：高松市歯科救急医療センター**

**〒760－0066　高松市福岡町３－３６－２３　ＴＥＬ：０８７－８５１－１１６６**

**◇日　時：平成２８年９月２５日（日）　１０時～１３時１０分**

**タイムテーブル；講演１（枝広先生） １０時１０分～１０時５０分**

**講演２（西田先生） １０時５５分～１１時３５分**

**講演３（岡崎先生） １１時４５分～１２時２５分**

**質疑応答・総合討論 １２時３０分～１３時**

**◇主催者：公益社団法人　高松市歯科医師会**

**◇後　援：高松市、高松市教育委員会**

**◇講　師：枝広あや子先生、西田　亙先生、岡崎好秀先生**

**◇定　員：１８０名（先着）**高松市民、高松市行政関係者、学校教諭等

　　　　　　　　　　　　　　高松市歯科医師会会員、会員家族など

**◇講師（パネリスト）紹介：**

**枝広あや子先生　東京都健康長寿医療センター研究所**

**自立促進と介護予防研究チーム（歯科医師）**

**専門：老年歯科医学、口腔外科学など**

**略歴：**昭和53年生まれ

平成15年 北海道大学歯学部卒業

平成15年 東京都老人医療センター　歯科・口腔外科　臨床研修医

平成17年 東京歯科大学オーラルメディシン・口腔外科学講座　入局

平成20年­ 東京都健康長寿医療センター研究所　協力研究員

平成23年 学位取得、博士（歯学）東京歯科大学

平成24年 東京都豊島区歯科医師会　東京都豊島区口腔保健センター

あぜりあ歯科診療所勤務

　東京都健康長寿医療センター研究所　非常勤研究員

　東京歯科大学オーラルメディシン・口腔外科学講座　非常勤講師

平成27年 東京都健康長寿医療センター研究所　研究員

**所属学会：**日本老年歯科医学会　認定医、日本咀嚼学会　健康咀嚼指導士、日本口腔外科学会、

日本摂食嚥下リハビリテーション学会　認定士、日本静脈経腸栄養学会　ＴＮＴ研修終了、

認知症の人の食支援研究会、日本老年医学会、日本認知症学会、日本認知症ケア学会、

日本歯科衛生学会、日本心身医学会

**西田　亙先生　西田わたる糖尿病内科院長（糖尿病専門医）**

**略歴：**広島県広島市出身

昭和63年 愛媛大学医学部　卒業

平成 5年 愛媛大学大学院医学系研究科　修了 (医学博士)

平成 6年 愛媛大学医学部・第二内科　助手

平成 9年 大阪大学大学院医学系研究科・神経生化学　助手

平成14年 愛媛大学医学部附属病院・臨床検査医学（糖尿病内科） 助手

平成20年 愛媛大学大学院医学系研究科・分子遺伝制御内科学（糖尿病内科）特任講師

平成24年 にしだわたる糖尿病内科 開院、現在に至る

**◇◆歯科関連著作**

西田亙, 原瀬忠広, こんなに歯科に身近な糖尿病, 歯科衛生士, 39 (11):57, 2015

西田亙ら, 医科歯科社会連携による健口から健幸への道のり, 日本歯科医師会雑誌, 68 (1):35, 2015

西田亙, 歯周病 (慢性歯周炎), 糖尿病合併症事典, 糖尿病診療マスター, 12 (3):279, 2014

**岡崎好秀先生モンゴル健康科学大学 客員教授（歯科医師）**

**専門：小児歯科・障がい児歯科・健康教育**

**略歴：**昭和53年愛知学院大学歯学部卒業　同年大阪大学歯学部小児歯科を経て、昭和59年より平成25年3月まで岡山大学病院小児歯科　講師

日本小児歯科学会 専門医・指導医、日本障害者歯科学会 認定医、日本口腔衛生学会 認定医、日本禁煙科学会 評議員・学術委員

**◇◆主な著書**：①泣きの予防も予防の一つ クインテッセンス出版 ②動物おもしろ カミカミうんち学 少年写真新聞社 ③教えて恐竜！ 僕達の大切な歯 少年写真新聞社 ④カムカム大百科 歯科医から見た食育 東山書房 ⑤動物達の良い歯甲子園 東山書房 ⑥謎解き口腔機能学 クインテッセンス出版等多数

**※お越しの際には公共交通機関をご利用下さいますよう、ご理解、ご協力の程よろしくお願いいたします。**

高松市歯科医師会法人化４０周年記念シンポジウム　参加者名簿

　　 所属先：

|  |
| --- |
|  |
| ご氏名 | 職名 | ご氏名 | 職名 |
|  |  |  |  |
|  |  |  |  |
| 合　計 　 　　 名 |

**◇講師（パネリスト）抄録：**

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | **枝広あや子先生** |  **東京都健康長寿医療センター研究所 自立促進と介護予防研究チーム（歯科医師）** |

**『認知症発症をみすえた口腔管理のエッセンス』**

　認知症の高齢者では、認知症の進行に伴い周囲の物事の見当識が曖昧になり、日常生活行動

の自立が困難になっていく中で、「食」は最後の自立行動である。この「食」を支える要素の

一つが健全な口腔であることは論を待たないであろう。

　テレビや雑誌などでも認知症予防特集が組まれるなど“認知症予防”の機運が高まっている

現在である。そのなかでも口腔の健康や、栄養状態の維持についての知見が少しずつ得られて

きた。特にトピックスとなっているものが咀嚼能力の維持とライフスタイルである。地中海式

食生活が認知症予防に効果があるといわれて久しいが、摂取する食材のみならず、友人と楽し

く集って食事をするライフスタイル、すなわち社会性の維持、それを支える口腔の健康の維持

が注目されている。

　口腔機能は日頃何気なく使用しているが為に、機能の変化に気付きにくい。

しかしながら対人コミュニケーションの重要な部分を担う表情や距離感、会話、社交的な心理

状態などは口腔機能によっても大いに支えられている。また口腔内の炎症が認知症発症のリス

クの一つになるという報告や、咀嚼によるリンパ液循環の維持が認知症発症予防に重要という

報告など、様々な発展的な知見があるもの事実である。口腔機能低下による栄養摂取の偏りは、

更なる全身の運動機能低下と社会性の低下や認知機能低下を招くことも指摘され、重大な健康

障害におちいるリスクを適切に管理することも必要とされている。

　このように口腔機能と栄養、運動機能、社会性、認知機能は互いが影響しあっているもので

あり、複合的に支えてこそ、楽しく美味しく安全に食事を楽しむことにつながる。本日は認知

症の摂食機能の変化とその変化に合わせる医療をふまえ、今からでも取り組むべき習慣につい

て皆様と一緒に考えてみたい。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | **西田　亙先生** |  **にしだわたる糖尿病内科院長（糖尿病専門医）** |

**『歯科が誇る連続性こそが次世代を糖尿病から守る**

**～　　我が事から我が子の事、我が孫の事へ　』**

　戦後間もない頃、この日本において糖尿病は肺癌よりも珍しい病気でした。それが今や、犬

も歩けば糖尿病患者に当たる時代になっています。なぜ、これほどまでに糖尿病患者数が増え

てしまったのでしょうか？そしてまた、どうして医療従事者と行政は、その増大を未然に防ぐ

ことができなかったのでしょうか？

　人間は、特殊な病態を除けば、突然糖尿病を発症するようには出来ていません。数年から十

年前後をかけて、徐々に血糖値が上昇していき、最後の最後に膵臓が耐えられなくなり、糖尿

病を発症します。この糖尿病予備群の段階を耐糖能異常と呼びますが、ほとんどの方が自分の

体が発する声なき声に気付いていません。血糖値が少々高い程度では、人間は自覚症状として

感じることが出来ないからです。しかも、検診などで使われている検査値の基準は、あくまで

も糖尿病と診断するためのものであり、糖尿病の発症予防は一切考慮されていません。検査で

見つかった時は、時既に遅し…ということになります。

　よって、糖尿病予防という観点から見ると、日本の医科医療は全く頼りになりません。で

は、一体誰が日本国民を糖尿病発症から守ることが出来るのでしょうか？私は、歯科医療の他

には、人々を糖尿病発症から守ることはできないと考えています。

　当日の講演では、中高年だけでなく将来母となる若い女性や、小学生の体の中で起きている

恐るべき糖代謝異常の現状をご紹介しながら、次世代を糖尿病から守ることが出来る歯科医療

の潜在的な力を、内科医の観点からご紹介致します。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | **岡崎好秀先生** |  **国立モンゴル医科大学 歯学部客員教授（元 岡山大学病院小児歯科 講師）** |

**『歯科医師から見た食育』**

　「食育基本法」は、子ども達が、体に良い食べ物を選ぶ力を身につけ、将来の生活習慣病を

予防することを目的としている。この法律が制定された背景には、現在生活習慣病が増加して

おり、その根源は子どもの頃の食生活にあると考えられるためである。そこで地域の学校で

は、盛んに“食育”に関する活動が行われている。

　さて、ドイツ語では“食べる”には二つの動詞がある。一つは“fressen”、もう一つは

“essen”である。前者は、“動物が食べること”、すなわち“生命保持として食べる”の意

味がある。後者は“人間が食べること”、すなわち“おいしく食べる”・“楽しく食べる”を

意味する。“栄養学”を主体とした食育は、“fressen”の意味合いが強い。 本来の“食事学”

としての視点から考え直す必要があるように思う。

　私は、“口は食べ物が最初に入る場所であるから，食べ物が変われば最初に変わるのは口”

ではないかと考えてきた。

　我が国が“乳歯齲蝕の洪水”とまで言われた時代は、砂糖に子守をさせていた時期である。

そして軟らかい食物の増加により、歯周疾患が増加したと言われる。

　さらには、不正咬合の増加・唾液分泌量の減少・滑舌の低下・口呼吸など食物や食べ方の変

化が原因の一つと考えられることが多い。

　今こそ、“歯科医師の立場”から本来の食育に対して提言を行うべき時期を迎えているので

はないだろうか。

　当日はみなさまと“歯科医師から見た食育”について一緒に考えてみたい。